

7-4 子宮筋腫塞栓術 (UAE) 症例における血中 Vascular endothelial growth factor (VEGF) および子宮動脈血流血管抵抗変動に関する検討

大阪大¹, 大阪府立成人病センター²

武田 卓¹, 森重健一郎², 坂田正博¹, 田坂慶一¹, 村田雄二¹

【目的】子宮筋腫塞栓術 (UAE) は子宮筋腫に対する新しい治療の一方法として行われるようになってきたが合併症や長期予後など多くの問題が未解決である。UAE 前後における生体の変化についての基礎的検討は現在のところ全く報告をみない。VEGF は虚血・低酸素時に産生される増殖因子として知られ、また子宮筋腫組織において高発現していることが報告されている。今回われわれは UAE 前後の血中 VEGF 変動、子宮動脈血流血管抵抗変動について検討したので報告する。【方法】対象は、当院にて子宮筋腫の診断で UAE を行った12症例。インフォームドコンセントを得た後、UAE の術前、術後1日目、3日目、7日目に採血を行い血漿中 VEGF 濃度を ELISA 法にて測定した。同時に両側子宮動脈血管抵抗を超音波パルスドップラー法を用いて経腹的に計測した。【成績】UAE の術前後で VEGF 値は全例上昇し、術後1日目または3日目の最高値 (102.4 pg/ml) は、術前値 (33.4pg/ml) と比較して有意な上昇を認めた ($P < 0.05$)。特に高値を認めた症例 (397pg/ml) では全身浮腫を認めた。浮腫や子宮腫大感を自覚した症例 (201.3pg/ml) では無症状の症例 (71.1pg/ml) と比較し VEGF 値は有意に高値であった ($P < 0.05$)。子宮動脈血流は11例で術前に計測可能であり、術後は1日目より計測可能であった。計測可能例全例で術前後で血管抵抗の上昇、血流波形の途絶が認められた。【結論】UAE 症例での術前後の VEGF 測定や子宮動脈血管抵抗測定は塞栓による子宮筋腫の虚血状態評価の指標になりえるものと考えられた。

4
月
12
日
月

一般演題

7-5 子宮動脈塞栓術前後での子宮筋腫結節・内膜および筋層における組織学的変化の検討

大阪市立大¹, 大阪市立総合医療センター², 大阪・阪和住吉総合病院³

市村友季¹, 川村直樹², 辻村朱美³, 金岡 靖¹, 本田謙一¹, 平井光三¹, 安井智代¹, 角 俊幸¹, 松本佳也¹, 石河 修¹

【目的】子宮動脈塞栓術 (UAE) の臨床的検討は数多くみられその有用性も評価されているが、組織学的検討がなされる機会が少ないため、現在のところ妊娠を希望する場合は原則禁忌であるなど適応となる症例の制限も多い。UAE 前後における子宮の組織学的変化から、UAE 後の子宮機能温存を病理組織学的見地から検討した。【方法】対象は UAE および組織採取に関するインフォームドコンセントの得られた子宮腫瘍患者のうち、術前に経子宮頸管の針生検 (針生検) にて子宮筋腫と確認され、術後も針生検による組織採取が可能であった4例で、UAE は右大腿動脈からマイクロカテーテルを用いてゼラチンスポンジ細片で塞栓した。【成績】術後、筋腫組織においては核の消失・変形や、細胞質の淡明化、出血など壊死や、変性を反映する所見が全例でみられた。これに対し子宮内膜や一部にみられた正常筋層では、1症例で内膜の部分的壊死がみられたもの、おおむね正常組織として保たれていた。臨床的には、UAE 後も4例全例で月経は規則的にみられたが、過多月経の症状は軽減していた。【結論】針生検にて UAE 前後の筋腫組織を直接採取することにより、壊死に陥った筋腫を組織学的に確認することができた。また、同時に得られた子宮内膜や正常筋層の組織には壊死や変性などの所見はほとんど見られず、これらに対する UAE の影響は、短期間に回復するほど軽度であったと考えられた。さらに症例を重ねることで筋腫のみを壊死させ子宮機能は温存するという UAE の利点を、病理組織学的見地から支持する根拠を得ることができると思われた。

7-6 UAE の子宮筋腫に及ぼす影響について

京都第一赤十字病院

山田俊夫, 伊藤良治, 藤原葉一郎, 小石清子, 山元三紗子, 加藤聖子, 中田好則

【目的】子宮筋腫に対する治療の一つとして子宮動脈塞栓術 (UAE と略す) が用いられるようになり、その優れた臨床効果が報告されている。そして UAE が若年婦人にも用いられているが、妊孕性に対する検討は十分にされていない。今回 UAE の子宮に対する影響について正常子宮筋層、子宮内膜、月経量、ホルモン動態を検査し、挙児希望者にも安全に行えるかについて検討した。【方法】UAE は両側の子宮動脈をゼラチンスポンゼル細片で塞栓した。症例は UAE 後に摘出した子宮 (2例)、UAE 後施行後に月経発来した子宮内膜生検組織 (6例) で HE 染色、Ki67 を用いて検討した。【成績】摘出子宮では、子宮筋腫結節は一樣に強い硝子様変性を示し、周囲筋層とは明瞭な境界を認めた。検査できたすべての筋腫結節には生存細胞は見られず、一方正常子宮筋層には出血、壊死等の所見はなかった。子宮内膜生検組織では、子宮内膜は腺管密度が低く、間質はやや浮腫状態でホルモンに反応するも形成不良と考えられた。子宮内膜の増殖能を調べるために Ki67 染色を行ったが、すべて1~5%未満で増殖能の低下と考えられた。月経量はすべて減少し1/2から1/10となったが、無月経となった一例は43歳で術後1年、FSH, E2とも正常、排卵周期であった。【結論】UAE により子宮筋層には明らかな影響は見られなかったが、子宮内膜では腺管密度の減少し、内膜の菲薄化がみられた。月経量の減少は筋腫サイズの縮小だけでなく、内膜の菲薄化も関与する一因と考えられ、挙児希望者への UAE は適応外と考えられた。